

「乖離、そして私が思う日本」

皆さん、初めまして。沼津工業高等専門学校のアンジェと申します。インドネシアから参りました。これから「乖離、そして私が思う日本」についてスピーチをさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

もしタイムマシンがあったら、皆さんはどうしますか？私だったら、そうですね、日本に行きたいと強く願っていた、過去の自分を、止めに行こうかなと思います。少なくとも半年前の私は、本気でそう思っていました。

「日本に留学する」というのは、きっと様々な困難に遭遇する。それは、いかに無知な私であっても理解していました。しかし、まさか日本に来て3年目になって、まだまだ異文化に馴染んでいないとは、考えもしませんでした。

私を驚かせたのは、普段は言葉にしない、日本に存在する暗黙の了解です。友達になるためには、何か共通の話題や趣味がなければならないこと。異性に対して話しかけると、すぐに恋愛的な興味があるのだと見なされてしまうこと。そして、「メイクをするのがエチケット」とか「この身長だったら理想の体重が30kg」といった日本人の美に対する標準など。

「郷に入っては郷に従え」と言われますが、私は別にルールを破っているわけでも、異文化を拒否して他の人の迷惑になったわけでもありません。ただ、「他の人もそうだから」とか、「昔からずっとそうだから」といった明確な理由なしに、なぜこれらの習慣に従わなければならないのか、納得がいかなかったのです。

さらに言えば、私が住んでいる寮で盗難事件があったとき、外国人というだけで、私が真っ先に犯人として疑われました。私は、インドネシア人として生まれたくて生まれたわけでもないのに。

この考え方のせいで、私の理想と現実の間に乖離が始まりました。日本について知れば知るほど、それは昔から愛していた日本ではないと感じるようになりました。その結果、日本に住んでいるにも関わらず、日本のものを全て積極的に避けるようになりました。

長い間、抑うつと乖離の状態が続いた後、私はあることに辿り着きました。たった一人の人間が世界のやり方を変えるなんて、できるわけがありません。しかし、自分の考え方なら、変えることができます。私は、「世の中に完璧な国などない」という事実を受け入れ、自分の理想に固執するのをやめました。

多分、私がまだ故郷に残っていたら、こういった不完全さの中にこそ、人間的な優しさや、真実の価値が潜んでいることなどを、きっと、学べなかったでしょう。

そのおかげで私は今、ここにいられることに幸せを感じます。飲める水道水や、いつも時間通りの電車。そして、文学やゲームといった形で、最高のフィクションを生み出す日本の力に、日本のあらゆる小さなことに、心の奥底から、感謝しています。

3年数ヶ月経った今、もう「理想の国」を求めています。むしろ、欠点さえも愛おしく思えるように、「痘痕も醫（あばたもえくぼ）」の心境^{しんきょう}で、挑戦と理解を通して見つけた、「ありのままの日本」をこれからも、受け入れていきます。

以上、私のスピーチになります。ご清聴、ありがとうございました。